
バカと双子と召喚獣

カステラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと双子と召喚獣

【Nコード】

N0117Q

【作者名】

カステラ

【あらすじ】

吉井明久の幼馴染、佐坂 朝日・月夜の双子の姉妹は、振り分け試験当日休んでしまい、Fクラスに。Fクラスの仲間達と力を合わせ、Aクラスに挑む物語が、今始まる！！

2人で書いているので、更新ペースがバラバラです。

キャラ設定

さやかあさひ
佐坂朝日

誕生日：12月24日 血液型：B型

月夜の双子の姉。月夜と二人暮らし。

明久と同じマンションで隣の部屋。明久の幼馴染。

木下家と昔からの知り合い。

文月学園2年Fクラス。振り分け試験当日、休んでFクラスに。

成績：学年主席。総合科目6000点前後。

得意科目：数学、科学、物理

苦手科目：現国、世界史

運動神経抜群だが、料理オンチ。

1年の時は明久達と同じクラスだった。両親は明久の両親と一緒に海外出張中。

本気で怒ると男口調に。

外見：ピンク色の髪で右の上でくくっている。長さは腰の辺りまで。

美人。

装備：スタンガン、カッター、黒金の腕輪。など

〈召喚獣〉

黒い悪魔のような衣装で、背中に真っ黒な羽が付いている。頭にリボンのついた黒いカチューシャを付けている。かわいい。

装備：黒い槍

腕輪：自由に武器が変えられる。『武器変化』
チエンジ

さひか
佐坂月夜

誕生日：12月24日 血液型：A型

朝日の双子の妹。病弱。

文月学園2年Fクラス。振り分け試験当日に熱を出して休む。昔、誘拐されたことがある。

成績：学年次席。総合科目6000点前後。

得意科目：古典、世界史、現国

苦手科目：保体、科学、物理

運動オンチだが料理上手。1年の時は翔子達と同じクラス。

外見：水色の髪で、肩より少し長めで少しパーマをあてている。白い水玉のカチューシャをつけている。かわいい。双子そろってもてる。

装備：ミニ救急セット。ミニ裁縫セット（明久と朝日のため）黒金の腕輪。

（召喚獣）

白い天使のような衣装で、背中に真っ白な羽が付いている。頭にリボンのついた白いカチューシャを付けている。かわいい。

装備：白い弓矢

腕輪：召喚獣が飛ぶことができる『飛行』バタフライ

キャラ設定（後書き）

とりあえずキャラ設定です。

次回はプロローグ！

次も見てください！！

プロローグ

「クラス振り分け試験」当日の朝

↳ side 明久↳

「じゃあ、行ってくるよ」

「まあ、明久はバカだからFクラスだろうけど、私達の方も頑張ってきてよね」

なんだか今ものすごくバカにされたような気がする……。

「えっ！？僕がFクラスに入るとは決定なの！？……まあいいや。月夜は本当に大丈夫？」

僕は振り分け試験当日に熱で倒れた幼馴染の心配をする。

「大丈夫に決まってるじゃない。姉である私がついているんだから」

え……？それ本気……？

「それが一番心配なんだけど……」

「どっという意味よっ！！」

「だって料理とかできないじゃないか」

「うっ……。そ、それを言わないでよ。……気にしてるんだから」

あつ。そこは自覚してるんだ。

「まあとりあえず、昼ごはんは用意してあるから、温めて食べてね」

「う、うん。分かった」

「じゃあ時間がないから僕はもう行くね。朝日、月夜の事よろしくね」

「言われなくたって、分かってるわよ。あんたこそ、振り分け試験頑張ってくださいよ!!--」

「うん。ありがとう。それじゃあ、言ってきます!!--」

僕は文月学園へ向かった。朝日と月夜のためにも……頑張らないとね。

プロローグ（後書き）

はい！始まりました！と言っても、プロローグですけどね。
次回は本編が始まります
次も見てください！以上、カステラでした

【第1問】

バカテスト 化学

問 以下の問いに答えなさい。

『調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を1つ挙げなさい』

姫路瑞希・佐坂朝日の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点。』

合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、姫路さんと佐坂さんは引っ掛かりませんでしたね。

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

佐坂月夜の答え

『合金の例……鉄・・・だと思われれます』

教師のコメント

合金なので『鉄』では駄目だという引っ掛け問題だったので、見事に引っ掛かってしまいましたね。後、佐坂さんは2人いるので、朝日さんと月夜さんと呼ばせていただきます。

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金）　すごく強い（』

教師のコメント

すごく強いといわれても。

（ side 朝日）

私達は今、ひたすらに走っている。なぜかと言つと……

「もう！明久が起こしても起こしても起きないから、遅刻しそうじゃない！！！」

「しょうがないじゃないか！昨日、夜遅くまで起きてたんだから！」

「どうせ、ゲームでもしてたんでしょ」

「うっ……！な、なぜバレた……」

「私達が何年幼馴染やってると思ってるの？」

「アキ兄は分かりやすいもん」

隣で、私の双子の妹と月夜が笑いながら言う。

「それにしても月夜。さつきから苦しそうだけど、大丈夫？」

明久が心配そうに月夜に聞く。

「う、うん……。だ、大丈夫……だから……」

「全然大丈夫そうに見えないんだけど……。まだ熱があるんじゃない……」

「熱なんかないよ。ただ、ちょっと……走り続けて、苦しい、だけ、だから……」

「ほら、苦しいんじゃないの。月夜は昔から体が弱いんだから、無

理しないで」

月夜は昔から病弱で、遊んでいた時によく、倒れたりしていた。

「……ほら、乗って。おぶって行くよ」

明久は、月夜の前にしゃがみこんで言った。いつも、こうなのよね……。

月夜が倒れた時、明久はいつも月夜をおぶってくれた。

だから月夜は明久の事が好きなのよね……。こつゆつ時だけ正義感が強いから。

「月夜。早くしないと本当に遅刻しちゃうよ?」

全く……こいつはにぶいんだから……。

「月夜、乗せてってもらいなよ。いつもおぶってもらってたじゃない」

私も明久に続いて、月夜をせかす。

「う、うん……。いつもありがとうね。アキ兄」

「ううん。この位らへっちらだよ。それに、今回は僕のせいでもあるしね」

「じゃあ、明久、急ぐわよ」

「分かってるよ。それに僕、体力はある方なんだから」

「そうね」

まあ、私の方が運動神経いいんだけど……。とりあえず、学校に急がなきゃ。

「吉井、佐坂姉妹。遅刻だぞ」

玄関の前でドスのきいた声に呼び止められる。この声は……。鉄人・
・ね。

「あ、鉄じ……。じゃなくて、西村先生。おはようございます」

「鉄人 おっはよう」

「ちよっ！アサ姉！西村先生だよ！？すみません、西村先生。おはようございます。それと、遅れてしまつてごめんなさい」

月夜が明久の背中の上で慌てふためく。別に鉄人って呼ぶ位いいじゃないの。

「吉井、今、鉄人って言わなかったか？」

「ははっ。気のせいですよ」

「ん、そうか？それから佐坂姉。お前は完全に鉄人と言ったな？」

「いいじゃないですか。その位、別に。」

「アサ姉……よくないよ。後、アキ兄。もう大丈夫だから、おろしていいよ？」

「ん……？そう？なら……」

明久は、月夜を自分の背中からおろした。

「佐坂妹。大丈夫か？？無理だけはするなよ」

「あ、はい。ありがとうございます」

「それにしても吉井と佐坂姉。普通に『おはようございます』じゃないだろうが」

「あ。すいません。えーっと……今日も肌が黒いですね」

「右に同じ。です」

「……お前らには遅刻の謝罪よりも俺の肌の色の方が重要なのか？」

私と明久に、遅刻の謝罪なんて気の利いた事ができるわけがない。

「そつちでしたか。すいません」

「そうに決まってるじゃないですか」

「本当にごめんなさい」

明久も月夜も。事実なんだからあやまる必要なんかないじゃない。

「まったくお前らは……まあいい。ほら、受け取れ」

そう言つて、鉄人は私達にそれぞれの名前が書いてある封筒を差し出した。

「あ、どーもです」

「どうせ、私達3人は、Fクラスなんだけど……」

「ちょっと！僕はちゃんと振り分け試験受けたよ!？」

「明久の頭なら、Fクラス确实じゃない」

「だってアキ兄、振り分け試験勉強とかしてなかったもん」

「ゲームやってたものね。私達が勉強教えようとしてあげたのに」

「うっ……。そ、それにしても、どうしてこんな面倒なやり方でクラス編成を発表してるんですか？掲示板とかで大きく張り出しちゃえばいいのに」

あっ……。逃げやがった……。

「アキ兄。それは多分、文月学園は世界的にも注目されている最先端システムを導入した試験校だからだと思つよ」

「佐坂妹の言うとうりだ。この変わったやり方もその一環ってワケだ」

「ふーん。そういうもんですかね」

こいつ……。絶対分かってないわね……。

そして、明久は封を開け、折りたたまれた紙を開き、書かれているクラスを確認する。

『吉井明久……Fクラス』

「やっぱりね」

こうして私達の最低クラス生活が幕を開けた。

【第1問】（後書き）

やっと本編が始まりました!!

続きを待っていてくれた人!!!（いるかわかりませんが）
お待たせしました

次の第2問は、まだ考えてなくて、投稿するのが遅くなります。
ごめんなさい。

感想・レビュー・ポイント待ってます!!

【第2問】

バカテスト 国語

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- 『(1) 得意なことでも失敗してしまうこと』
- 『(2) 悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喩え』

姫路瑞希の答え

- 『(1) 弘法も筆の誤り』
- 『(2) 泣きつ面に蜂』

佐坂朝日の答え

- 『(1) 河童の川流れ』
- 『(2) 踏んだり蹴ったり』

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら『猿も木から落ちる』、(2)なら『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋康太の答え

- 『(1) 弘法の川流れ』

教師のコメント

シユールな光景ですね。

吉井明久の答え

『(2)泣きつ面蹴ったり』

教師のコメント

君は鬼ですか。

佐坂朝日の答え

『(1)秀吉の台詞がみ^{セリフ}』

『(2) (雄二にとって)翔子にスタンガン』

教師のコメント

どういう意味でしょうか？

Side 朝日

「……なんだろう、このばかデカイ教室は」

「もう、すごいとしか言えないわね……」
「すごい……大きい……」

私達は2年Aクラスの前であっけにとられていた。

「アサ姉。早く行かないと……」

月夜が私の制服の袖を引っ張る。

「そつか。急がないとね。行くよ明久」

私と月夜がFクラスに向かって歩き出す。

「え？あ、待ってよ！朝日！月夜！」

明久があわててついてくる。そして私達はFクラスに急ぐ。

「何よここ……。すごいボロボロじゃない……」

私達は、Aクラスとは違う意味でFクラスの前であっけにとられていた。

「アサ姉、アキ兄。とにかく中に入ろう？」

「そうだね……。よし！入ろう」

そう言っつて明久は勢いよくドアを開けて、私達はその後続いた。

「すみません、ちょっと遅れちゃいました」

「早く座れ、このウジ虫野郎」

あ……雄二……。

「雄二君……。ひどい……。私、ウジ虫なんかじゃ……」

隣で月夜が涙目になる。

「あつ！？今のは明久に言ったんだ！！佐坂妹に言ったわけじゃない……！」

「ひどい……。アキ兄にそんなこと言うなんて……」

「俺はどっちにしる責められるのか!？」

「よくも月夜を泣かせてくれたわね！覚悟しなさい、雄二!!！」

私はポケットからスタンガン（20万ボルト）と言う電気を流すものを取り出す。

「悪かった!!だからそんな物騒な物をしまつてくれ!!！」

「ちよつと待つて朝日」

「なによ明久。邪魔するの??」

「助けてくれるのか!?!明久!!！」

「20万ボルトみたいな弱いやつじゃなくて、40万……いや、いつそ50万ボルト位の強いやつにしようよ」

「それもそうね」

「ふざけんな!!50万ボルトなんて、マジで死ぬぞ!!!!！」

「大丈夫だよ。雄二なら」

「それは俺なら死んでもいいってことなのか!？」

その間に私はポケットの中をあさる。……あ、あれ？

「ねえ明久。50万ボルト、今日は持ってないみたい。40万ボルトでいい?？」

とって明久にスタンガン(40万ボルト)を見せる。

「うん。ほんとに50万ボルトが良かったけど、40万でいいや」

「おい待て!!40万でも死ぬから!!」

「アサ姉、アキ兄!流石にそれは死んじゃうよ!!もうやめよう!？」

「もう!月夜は甘いよ」

「そうだよ!こいつには1回死んでもらわないと!!」

「1回死んだら人生終わっちゃうから!!」

「ったく。雄二?今回は月夜に免じて許してあげるけど、今度月夜になんか言ったりしたら、死ぬ覚悟でね??」

「だから佐坂妹に言っただけじゃ……」

「分かった??」

「はい……」

「いや。相変わらず朝日はすごいね。雄二をだまらせちゃうなんて」

「私って言うか、スタンガンね。まあ、武器とかななくても勝つ自信はあるけど」

「てか明久!!佐坂姉には敵わないからいいとしても、明久にボロクソ言われるのは我慢できねえ!!1発殴らせろ!!」

「雄二、ちなみに明久に危害を加えるのも許さないから」

ピタッ！

おお。すごい。石のように固まった。

「え〜と、ちょっと通してもらえますかね？って、なにをしているんですか？それと席についてももらえますか？HRを始めますので」

あ、先生。……福原先生だけ？

「なんでもありません。今席につきます」

「あ、はい」

「はい、わかりました」

「うーっす」

私達はそれぞれ席に……って、席って卓袱台に座布団？さすがFクラス……。てか席につかないと。

月夜は、明久の後ろの席（？）につき、私は月夜の隣に座る。

「えー、おはようございます。2年F組担任の福原慎です。よろしくお願いします」

そして福原先生は黒板に名前を……ってチョークすらないの??

「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されてますか？不備があれば申し出て下さい」

この教室は不備だらけだよ!!

「せんせー、俺の座布団に綿がほとんど入ってないです!」

「あー、はい。我慢してください」

「先生、俺の卓袱台の脚が折れています」

「木工ボンドが支給されていますので、後で自分で直してください」

「センセ、窓が割れていて風が寒いんですけど」

「わかりました。ビニール袋とセロハンテープの支給を申請してくださいましよう」

自分で直せっていうこと? Aクラスはあんなすごい設備なのに……。少し位その設備をFクラスにくれればいいのに。

「必要なものがあれば極力自分で調達するようにしてください」

……………うつ! くさつ!! ……この教室に敷き詰められてる古い畳のせい??

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね。廊下側の人からお願いします」

福原先生の指名を受け、車座を組んでいた廊下側の生徒のひとりが立ち上がり、名前を告げる。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しております」

あ、秀吉だ。あの外見、じっくり見ても女子と間違われるよね。……ちなみに、私の……好きな人。

「と、いうわけじゃ。今年1年よろしく頼むぞい」

秀吉は笑顔で自己紹介を終える。

「……………土屋康太」

秀吉に続き、今度の知り合い。口数が少ないのは、去年から変わってないわね。というより、このクラス、男子ばかりね。

「です。海外育ちで、日本語は会話はできるけど、読み書きが苦手です」

あ、いつの間にか、次の人。

「あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は」

ん？女子の声だ。良かったあ。私達以外にもいたのね。…………でも、この声って…………。

「趣味は吉井明久を殴ることです」

恐ろしくピンポイントかつ、危険な趣味を持つ女子って…

「はろはろー」

「…………あう。し、島田さん」

「吉井、今年もよろしくね」

やっぱり…………。この子しかいないわよね…………。彼女は、私や明久の去年のクラスメイトにして、明久の天敵、島田美波さん。

それにしても……。知り合いだらけね。このクラス……。

「です。よろしく」

そして、明久の番。明久は一瞬黙ってから、

「コホン。えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んで下さいね」

『『ダアアーリイーン!!』『』』

うっ。気持ち悪い……。吐き気が……。

「失礼。忘れてください。とにかくよろしくお願い致します」

明久が作り笑いでごまかしながら席に着く。隣を見ると、月夜も気持ち悪そうな顔をしていた。

「ちょっと明久!どんな自己紹介してるのよ!おかげで私も月夜も気分が悪いわ……」

「そうだよアキ兄……。……野太い声の大合唱……」

私と月夜が明久に文句を言う。

「い、ごめん……。まさか本当に言われるとは……。Fクラス恐るべし……」

言った張本人も気持ち悪そうにしていた。

「アンタが言わせたんでしょう。って、次私の番だ」

そう言っつて私は自己紹介をするために立ち上がる。

「佐坂朝日です。月夜の双子の姉で、明久の幼馴染。よろしくね」

『吉井を殺せええー!!』

『『『うおおおー!!』』』

「あ、ちなみに月夜と明久に危害を加える人は、許さないからね」

『『『すいませんでしたああー!!!!』』』(土下座)『』』

明久を殺そうとしていた人達が1瞬で私にあやまってくる。

……速すぎない?動き。……まあ、

「分かればよし」

私は微笑みながら席に座る。

『美人の微笑みサイコー!』

『皆!今から朝日さんのことを姉御と呼ぼう!』

『『『賛成!』』』

……。

「っつて、ちょっと!なんで姉御!?なんで今までの流れでそうなるの!?!」

「まあまあ。別にいいじゃないか」

よくないって!!

「そんなことよりありがとう朝日。朝日がああ言ってなければ、僕殺されてたよ……」

「……そんなことって……。もういいや……。姉御で……。てか人殺しって犯罪よ?そんなことする?」

「いや。なんかしちやいそつで……。次、月夜の番だよ?」

「あ、私?分かった」

そう言つて月夜が立ち上がる。

「えっと、佐坂月夜です。1年間よろしくお願いします」

月夜が礼をして席に座る。その直後。

『『『かわいいーっ!』』』

『姉は美人で妹はかわいって……』

『双子萌え!!』

『そんな双子と幼馴染って……』

『『吉井……。死ねええっ!』』』

そう言いながら明久に突つ込んでくるクラスメイト。月夜も驚いて私の後ろに隠れちゃったし……。

はあ……。しょうがないか……。

スクツ　　シャシャシャシャッ!!

『『『……』』』

「皆?明久に危害を加える人は許さないって……言わなかったっけ

……?？」

私は立ち上がって、皆の進行方向
カッターを投げながら言う。 明久の前
の畳に

『皆……。吉井を殺すのはやめよう……』

『そうだな……。姉御に嫌われたら……。俺は……』

あ……。姉御は決定なのね……。

「ちよつと朝日!!今の外れてたら僕に当たっていたよね!？」

「アキ兄。そんな大きな声出したら怒られちゃうよ?」

「そうよ。それに私の狙いは外れないわ」

「佐坂姉はあいかわらずだな」

近くに座っている雄二が入ってくる。

「当然よ。月夜のためでもあるし……」

「やっぱりあいかわらずの”シスコン”っぷりだな」

「……なんと言ってくれてもかまわないわ」

てゆーか、知らないうちに自己紹介が進んでるけど……。いつか。

「やっぱりFクラスは女子が少ないね?」

「ん?明久、あっちで佐坂妹としゃべってたんじゃないのか?」

……。せつかくのチャンスだったのに……。月夜、ドンマイ。

その時、ガラリと扉が開いた音がした。

「あの、遅れて、すいま、せん……」
『えっ?』
『』

【第2問】（後書き）

やっとできました第2問。
めっちゃくちゃです。

なにかアドバイスなどあったら遠慮なく行って下さい。参考になる
ので。

【第3問】（前書き）

1年生の時、朝日はDクラス。

月夜はCクラス、という設定です。

原作を思いつきり変えており、Cクラスには、

瑞希・優子・翔子・美春・久保・愛子（転校後）

がいます。

朝日はCクラスによく遊びに行っており、

Cクラスの人達と仲が良いです。

【第3問】

side 朝日

「あの、遅れて、すいま、せん……」

『『『えっ？』』』

誰からというわけでもなく、教室全体から驚いたような声上がる。そりゃああの子がここにいたら普通はびっくりするよね。

「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さんもお願ひします」

福原先生平然としてるわね。そりゃそうか。先生だし、理由も知ってるだろうしね。

「は、はい！あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願ひします……」

彼女 姫路瑞希は、小柄な体を縮こませ声を上げる。

「はいっ！佐坂姉妹と姫路さんに質問です……！」

先程自己紹介を終えた生徒（もちろん男子）が右手をあげる。

「って、私達も??」

「あ、は、はいっ。なんですか？」

「なんですか？」
「なに？」

瑞希は登校してきていきなり質問されて驚いている。

「なんでここにいるんですか？」

聞きようによつては失礼だけど……。当たり前の質問よね。瑞希は入学して最初のテストで学年4位の成績を残す程の秀才だ。ま、私と月夜は学年1位2位だから、そんなこといえないのよね。だからこそ私達がFクラスにいるなんて誰も思わないだろう。

「そ、その……振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました……」

「私は振り分け試験当日、家で熱を出しちゃって……」

瑞希に続き、月夜も説明する。

「それで、私は月夜の付き添い」

私達3人の話を聴き、クラスの人々は「ああ、なるほど」とうなずいた。

「そつえば俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに」

「ああ。科学だろ？アレは難しかったな」

「俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて」

「お前が死ぬ一人っ子」

「前の晩、彼女が寝かせてくれなくて」

「裏切り者には死を」

「すみません大嘘です！」

「ぼ、僕は」

「ウソね」

「……って、はやっ！！僕まだ何も言っていないんだけど！！」

明久を含めて、バカばかりだ。

「で、ではっ、1年間よろしくお願いしますっ！」

瑞希が逃げるように、明久と雄二の間で、私の前の席(?)につく。

「き、緊張しました……」

「瑞希」

「え？あ、朝日ちゃん！」

いきなり声かけ大成功！！

「久しぶりっ 3学期以来だね」

私と瑞希は……えっと……小学校と中学校が同じで、まあ幼馴染ってやつね。もちろん月夜と明久も。

「あのさ、姫」

「姫路」

かぶった！？てゆうか”かぶせた”の方が合ってるわね……。

「は、はいっ。何ですか？えーっ……」

「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む」

「あ、姫路です。よろしくお願いします」

昔から思ってたけど、瑞希って何でも丁寧よね……。月夜にちょっと似てるかも。って思う時もある。

「ねえ瑞希ちゃん。体調はもう大丈夫??」

いつの間にか、月夜が話に入ってきた。

「あ、それ私も思う」

「僕も僕も」

「あ、えっと……って明久君!？」

え?今頃気付いたの?ずっといたのに。

「姫路。明久がブサイクですまん」

雄二……。それ、フォローのつもり?それとも悪口??

「雄二……。覚悟はいい?」

「はあ!?!……し、しまった!?!や、やめろ。あれは冗談だ冗談!」

「……仕方ない……。今回は許してあげる。でも次は……」

「わ、わかった、分かったから!」

「全く……これからは気をつけなさいよ」

「そうだよ、雄二君。そ、それにアキ兄はブサイクじゃないんだから!」

おっ。月夜、今のは好印象じゃないかしら??

「そうです!明久君は目もパッチリしてるし、顔のラインも細くて

綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ！その、むしろ……」

あゝ。瑞希も明久のことが好きだからねえ……。

「そう言われると、確かに見てくれは悪くない顔をしているかもしれんな。俺の知人にも明久に興味を持っている奴がいたような気がするし」

えっ……？マヂ??

「え？それは誰」

「「そ、それって誰(ですか)っ!?!」」

必至だなあ……。ま、ライバルが増えるかもしれないし……。

「確か、久保」

……久保? …… ああ……。確か……

「 利光だったかな」

……利光って、明久のこと好きだったなあ……。男なのに。

「……………」

「おい、明久。声を殺してさめざめと泣くな」

「元気だしなさい。明久」

きっとお婿に行けないとか、お嫁に行けないとか思ってるんでしょ
うね。

「半分冗談だ。安心しろ」

「え？残り半分は？」

半分どころじゃすまないよ……。

「ところで姫路、佐坂妹。体は大丈夫なのか？」

うわ、大胆に無視した！

「あ、はい。もうすっかり平気です」

「うん。充分休んだからね」

「ねえ、雄二。残りの半分は？」

「……………明久。半分どころか100%本当よ」

「え！？ちよ、朝日！今の話ちよつと詳しく！！」

「アキ兄。ちよつとうるさ」

「はいはい。その人たち、静かにしてくださいね」

私の衝撃発言に明久が大きな声を出してしまい、月夜が注意をしようとしたところ、先生がパンパンと教卓を叩いて先生が警告をしてきた。

「……………あ、すいませ」

私と月夜と明久が謝ろうとしたところ

バキィッ バラバラバラ……

突如、先生の前で教卓がごみ屑と化した。……………今のは強い力で叩い

「たんだよね？ね！？」

「え？軽い力で叩いた？……信じたくないほど最低な設備ね。」

「え……替えを用意してきます。少し待っていてください。」

「気まずそうに告げると、先生は足早に教室から出て行った。
なによこのクラス……。」

「あ、あはは……。」

前で瑞希が苦笑いをしており、月夜がおろおろしていた。

「……雄二、ちょっといい？」

そんなとき、明久が雄二に声をかけていた。

「ん？なんだ？」

「ここじゃ話しにくいから、廊下で」

「別に構わんが」

「私も行く」

「なんか楽しそう」

「え？朝日も？うん。まあいいか」

「じゃ、月夜、瑞希。ちょっと行ってくるね」

「そう言つて3人で教室を出る。」

その時、1瞬だけ明久と瑞希の目が合つてたような気がする。

【第4問】（前書き）

明久は、木下姉弟とも幼馴染です。

瑞希とは原作より仲が良いです。

明久は優子のことを「優子」

瑞希は明久のことを「明久君」と呼んでいます。

【第4問】

side 朝日

「んで？話って？」

「なに？さつさと話しちゃいなさいよ」

「うん。この教室についてなんだけど……」

この教室Ⅱ Fクラス

「Fクラスか。想像以上に酷いもんだな」

「ええ。なんか置腐ってるし、設備だけじゃなく教室そのものが…

…ね」

「2人ともそう思うよね？」

「もちろんだ」

「当然よ」

このクラスに不満を持たない人なんているのかしら？

「Aクラスの設備は見た？」

「ああ、あれね。すごいとしか言いようのなかったやつ」

贅沢すぎるんじゃない？

「ああ。あんな教室があるなんてな。高級ホテルのロビーみたいだ」

この学校の方針だからって、いくらなんでも差がつきすぎよ。

「でしょ？だから提案があるんだけど。『試召戦争』をやってみない？僕ら折角2年生になったんだし」

試召戦争！？やってみたいところはあるわね……。

「戦争、だと？」

「私、試召戦争やってみたいんだけど。どこ相手にやるの？」

「Aクラス相手にやりたいな、って」

Aクラス？うーん……不可能じゃないわね。

「……何が目的だ？」

「雄二、そんな目を細めて警戒しなくても。どうせ、雄二もやるつもりだったんだでしょ？」

「はあ……。やっぱりばれてたか……」

「え？そうなの？」

……明久は知らなかったのかしら？去年雄二自身が言ったと
ああそっか。明久だもんね。

「朝日。なんか僕バカにされてるような気がするんだけど」

なんで分かった？こいつ。

「気のせいじゃない？で、明久はなんで試召戦争をやりたいと思っ
たの？」

「あ、いや、だってあまりにもひどい」

「嘘をつくのはやめなさい」

明久のことだし月夜と瑞希のためとか……。2人とも体弱いし。

「だから早いつて!」

「私に嘘は通用しないわよ?」

「うぐつ……わかったよ。試召戦争をやるのは、月夜と姫路さんのためだよ……。」

やっぱり。ていうかそれしかないわよね。

「へえ。やっぱりか」

「やっぱり。って分かってたんじゃないか!なぜ聞いた!？」

「はいはい。話をもとにもどしましょう」

この2人はこうなると止まらないから……。

「で、雄二も試召戦争をしようと思ってるんでしょ?」

「ああ。それも明久と同じAクラスにな」

「なんで?雄二も設備に興味なんかないでしょ?」

雄二は、勉強なんかしないだろうしね。

「俺は、世の中学力が全てじゃないって、証明を試みたいんだ」

「証明???」

「翔子?」

あの2人はなんか色々あるらしいから……。

「な、なぜそれを!? まあ、Aクラスに勝つ作戦も思いついたし」

あ、凶星だったみたいね。……そういえば……。

「明久。もしかしたら、Aクラスには優子がいるんじゃない？」
「……そういえば。優子って、賢いから……。」

後でAクラスに行ってみようかしら……。

「おい、2人とも。優子って、あの木下優子か？」
「ええ。雄二、後でAクラスにおじゃましていい？」
「ダメだ」

……即答で却下されちゃった……。

「なんでよ？」

「お前ら佐坂姉妹と姫路は秘密兵器だからだ。Fクラスにいることを知られてはいけない」

「じゃあ僕は??」

「明久がFクラスにいるのは当たり前だからいいぞ」
「僕はそんなにバカじゃないよ!!」

……明久。アンタは誰もが認める究極の馬鹿だよ……。

「行くときは、その3人がFクラスにすることがばれない様に頼むぞ」

「分かってるよそれくらい!!」

明久。本当は分かってなかったんじゃない？

「2人共、先生が帰ってきたわよ。教室に戻りましょ」

そのまま、3人して、教室に戻った。

く（ちょっと時間をさかのぼった）side 月夜く

「じゃ、月夜、瑞希。ちょっと行ってくるね」

アサ姉がそう言ってアキ兄と雄二君と一緒に廊下に出て行った。

「月夜ちゃん。3人は何の話をするんでしょうね」

「うーん。雄二君が試召戦争をやりたいて言ってたと思うからその話だったりして」

瑞希ちゃんと話をしてるうちにふと思いついた。

「瑞希ちゃん。話、ちょっと聞いてみない？」

「え？そ、そんなことしてもいいんでしょうか……？」

「アサ姉がいるから、大丈夫じゃないかな？」

アサ姉がいるから、聞かれてはいけないことはしゃべってない。…

…と思う。

教室の壁越しにこっそり聞きに行った時に聞こえたのは、

『うぐっ……わかったよ。試合戦争をやるのは、月夜と姫路さんのためだよ……。』

という、アキ兄のセリフだった。

「え……？ 私達の……ため？」

私は、なんでアキ兄がそんなことを言ったのかがよく分からなかった。

「……瑞希ちゃん。なんか話し込んでるみたいだから、席に戻ろうか」

「え？ あ、はいっ。そうですね……」

瑞希ちゃんもよく分からずに悩んでるみたいだった。

【第5問】（前書き）

3 / 2 2 訂正

【第5問】

Side 朝日

「さて、それでは自己紹介の続きをお願いします」

壊れたボロい教卓を、これまたボロい教卓に替えて（笑）、HRが再開される。

「え、須川亮です。趣味は」

それからは明久みたいなバカなことをする人はおらず「自分でも予想外だったんだよ!」、ふつつーの自己紹介の時間が流れる。……途中の声は無視ね。

「坂本君、キミが最後の一人ですよ」

「了解」

先生に呼ばれて席を立った雄二は……なんか、こっ……クラス代表っぽかった……?

「坂本君はFクラスのクラス代表でしたよね?」

いや、そう願っても、Fの代表だから五十歩百歩って感じよ?雄二。でも、すっごく自信満々って感じ。一体何を……???

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

好きなように？よし、じゃあ……

「月夜、”アレ”言っちゃえー!!」

”アレ”だね、アサ姉。分かった」

私達は小声でやり取りする。”アレ”と言っても、秘密兵器とか言うわけじゃないんだけど……。

「じゃあ雄二君。”霧島君”って呼んでいい？」

これが”アレ”の正体。普通だったらそれがどつしたの？と思うだろうけど、雄二には……

「そ、それはやめろ！そんな恐ろしいことを言うんじゃない！」

効果抜群。私たちは、あのことを知っているもの……。

「じゃあ、霧島家の婿養子??」

「冗談じゃねえ！俺の自由がなくなってしまうー!!」

ふと周りを見ると、皆意味の分からないという顔をしていた。

「冗談よ。話を進めてくれる？」

「あはは。ごめんね、雄二君」

雄二、続きよろしく。

「はあ……。体に悪い冗談だった……。さて、皆に1つ聞きたい」

雄二がゆっくりと皆の目を見るように告げる。

間の取り方が上手いせいか、すぐに全員の視線が雄二に向けられた。その後、雄二の視線は教室内の各所へ移った。

かび臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

つられて私達も雄二の視線を追ってしまう。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが」

「呼吸おいて、静かに告げる。」

「不満はないか？」

「『大ありじゃあつ！』」

2年F組生徒の魂の叫び。正直うるさい。

「だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

ぜつつしたい、嘘ね。個人的な理由が混ざってるくせに。

『そうだそうだ！』

『いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ！改善を要求する！』

『そもそもAクラスだって同じ学費だろ？あまりに差が大きすぎる』！

いや、そもそもあなたたちが勉強すればFクラスには入らなかったわよ？

「みんなの意見はもつともだ。そこで」

なんか不敵な笑みを浮かべて、

「これは代表としての提案だが」

これから戦友となる仲間たちに野性味満点の八重歯を見せ、

「 FクラスはAクラスに『試召戦争』を仕掛けようと思う」

Fクラス代表、坂本雄二は戦争の引き金を引いた。

これ、自分で思っというただけ、たとえばピストルかしら？

【第6問】

バカテスト 英語

問 以下の英文を訳しなさい。

「This is the bookshelf that my
grandmother had used regularly
y.
」

姫路瑞希・佐坂月夜の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です。」

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

「これは

」

教師のコメント

訳せたのは This だけですか。

佐坂朝日の答え

「これは ^{その}です The 本棚 あれは 私の 祖母 持ってい
た 使っていた レギュラー」

教師のコメント

色々と言いたいことはありますが、……ちゃんと訳して下さい。

吉井明久の答え

「 * x

」

教師のコメント

できれば地球上の言語で。

坂本雄二の答え

「私の祖母は野球のレギュラーだ。」

」

教師のコメント

ずいぶんと元気なおばあさんですね。

FクラスがAクラスに宣戦布告をする。

それは、私と月夜、瑞希がいても少し無理のある提案だった。

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『佐坂姉妹と姫路さんがいたら何もいらぬ』

……最後の人、絶対頭おかしいでしょ。（あ。だからFクラスなのか。）

でも確かに誰が見ても、AクラスとFクラスの戦力差は明らかだった。

AクラスとFクラスの点数は桁違いだし、例えば…… Aクラス代表の霧島翔子。

翔子相手だったら、Fクラスの人との点数の約6、7倍だし……。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや俺が勝たせてみせる」

雄二も戦力の差は、分かっているはずだけど……。

『何を馬鹿なことを』

『できるわけないだろう』

『何の根拠があつてそんなことを』

『佐坂姉妹大好きです』

「……最後の人出てきなさい。大丈夫よ？今日はスタンガン持ってきてるんだから」

『すいませんでしたあ！！』

……このクラス絶対おかしいですよ。特に最後の人。

とまあこれは置いていて、……やっぱりブーイングの嵐ね（最後以外）。ま、当たり前だけど。

「アサ姉、勝てると思う？」

「さあね。でも、雄二には作戦があるらしいわよ？それでも勝率は少ないけど」

「あはは。そうだよな」

私と月夜が小声でしゃべっていると、

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている」

次の瞬間、クラス中がざわめく。まあ、ないことはないけど……。私と月夜と瑞希はAクラスよりも上の成績だから。……それでも勝つことは難しいと思うんだけど……。

「それを今から説明してやる」

得意の不敵な笑みを浮かべ、壇上から皆を見下ろすFクラス代表。さて、勝つことのできる要素とは、一体なんなのかしらね。

【第7問】

side 朝日

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路と佐坂姉妹のスカートを覗いてないで前に来い」

「……………！！（ブンブン）」

「は、はわっ」

「きゃっ」

「……………康太あ？」

「……………っ！（ビクッ）」

私が睨みを利かせると、ちよつとだけ怯えながら（嘘。ホントはすごく怯えてるw）必死になって顔と手を左右に振って、否定のポーズをとる昨年もクラスメイトだった男子生徒。

瑞希と月夜がスカートの裾を押さえて遠ざかると（私？私は離れないよ？覗かれないようにしてるし）、康太は頬についでる畳の跡を隠しながら壇上へと歩き出す。

てか、普通あそこまでやる？堂々と覗こうとするなんて。明久は手

鏡で覗きこむって方法しか思いつかないのに。

「皆、寡黙なる性識者ムツツリーニというのは知っているか？それがこの、土屋康太だ」

「……………！！（ブンブン）」

たぶん康太は、本名よりも、ムツツリーニの方が有名でしょうね。男子生徒には畏怖いふと畏敬いけいを、女子生徒には軽蔑を。だっけ？私には関係ないし。

『ムツツリーニだと……………？』

『馬鹿な、ヤツがそうかどうか……………？』

『だが見る。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとしているぞ……………』

『ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ……………』

これ、褒め言葉のつもりなのかしら……………？まだ畳の跡を隠そうとしているし……………。

「……………？」

瑞希についてはムツツリーニっていうあだ名の由来が分からないから頭に疑問詞をいっばい浮かべてるし、月夜はさらに、

「ねえアサ姉。ムツツリーニって、なに？」

私に聞いてくるし。どうしよう。教えた方がいいのかしら??
悩んだ末、私は、

「月夜。それは気にしちゃだめよ。それにこのクラスで過ごしてたら、自然に分かるだろうから」

軽く流すことにした。だって別にムツツリーニがただの『ムツツリースケベ』ってことなんて、教えなくていいだろうし。

「姫路のことは説明する必要もないだろう。学年4位の力は、皆分かっているはずだ」

「えっ?わ、私ですか??」

「ああ。うちも主戦力の一人だ。期待している」

試召戦争をするんだったらAクラス上位の成績を持つ瑞希は頼りになるでしょうね。

『そつだ。俺たちには姫路さんがいるんだつた』

『彼女ならAクラスにも引けをとらない』

『ああ。彼女さえいれば何もいらないな』

さつきから女子にラブコールを送っているヤツは誰なのかしら？そ
ろそろはつきりさせたい。

「木下秀吉だっている」

まあ、秀吉は演劇がすごく上手いし、双子の姉の方は優等生（偽）
だしw

『おお……！』

『ああ。アイツ確か、木下優子の……』

秀吉の演劇能力は試召戦争に使えるそつな気がするしね。

「当然俺も全力を尽くす」

『確かになんだかやってくれそうな奴だ』

『坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか？』

『それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったのか』

『実力はAクラスレベルが2人もいるってことだよな！』

雄二が神童って呼ばれていたのって、小学生のころだったことを、皆忘れてるのかしら？

今はアイツ、実力でFクラスなのに。

「それにお前ら、忘れてねえか？このクラス。いや、この学年最強の姉妹のことを」

それに追い打ちをかけるようにまた、不敵な笑みを浮かべながら、雄二が言う。

「つて、え……？それ、私たちのことよね？姉妹って私達しかいないし……。」

「このクラスには、佐坂朝日・佐坂月夜の【陰陽姉妹】がいることを！！」

【第8問】

side 朝日

『何！？佐坂姉妹が陰陽姉妹だと！？』

『【陰陽姉妹】って、姉妹揃って圧倒的な点数を持つっていう！？』

『姉御愛しています！』

『月夜さん！結婚してください！！』

とりあえず、最後の2人は死刑ね。後でスタンガン浴びせよう。てか、点数が高い姉妹って私達しかいないはずなのに分からなかったの！？……これなんか傲慢になっちゃうからやめよ。でも分からなかったって、さすがFクラス……？

「佐坂姉妹。とりあえず前に出てきてくれ」

まあ、呼ばれたからには出て行かないといけないんだけど……。

「で、陰陽姉妹ってなに？初耳なんだけれど」

「私、陰？そんなに暗い？私」

月夜をつれて前に出て、さっそく雄二に聞いてみた。私達そんなの聞いたことないんだけど。

後月夜、あなたは暗くないわよ？ただ単に【陽】の反対が【陰】だっただけだと思うから。

あれ？じゃ、私【陽】??

「こいつらが陰陽姉妹こと、佐坂朝日・月夜姉妹だ」

「雄二、だから陰陽姉妹ってなに？」

「私、暗い？」

「月夜、暗くないから！気にしなくていいから！！」

なんか月夜は【陰】ってというのが気に入らなかったみたい……。

「皆1度は聞いたことがあるだろう。それと【陽光の守護^{まも}り】、【月光の癒し】。姉妹別々についているものも。この2人は学年主席・次席の学力を持つ！俺らがAクラスに勝てないわけがない！！」

まだあるの?? 私達の呼び名。もういいわ……。めんどくさくなってきた……。

『これなら勝てる!!』

『ああ!! 陰陽姉妹に姫路さんまでいるんだ!!』

『俺、Fクラスでよかったかも……!!』

『だれか付き合ってください!!』

うわっ………………。最後のヤツ、ついに誰でも良くなったのかしら……???
……?
そうだとしたら、最低……………。

「それに、吉井明久だっている」

……………シン

え…………???

【第9問】

side 月夜

「それに、吉井明久だっている」

雄二君がこう言ったとたん、確実に上がっていたクラスの士気が一気に下がった。

ていうか、アキ兄の名前をオチ扱いするなんて……雄二君ひどい……。

あ、なんか涙でできたかも……。

「ちょっと雄二！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！全くそんな必要はないよね！」

「そうよ！おかげで月夜が泣いちゃったじゃない！雄二は月夜の気持ち知ってるんでしょ！」

ふえっ！？ゆ、雄二君、知ってる……の……???

「月夜の気持ち？何それ??」

……アキ兄はあいかわらず鈍感だし……。

『誰だよ、吉井明久って』

『聞いたことないぞ』

「ホラ！折角上がりかけてた士気に翳りが見えてるし！僕は雄二たちとは違って普通の人間なんだから、普通の扱いを　って、なんで僕を睨むの？士気が下がったのは僕のせいじゃないでしょう！」

でもアキ兄は普通じゃあ、ないんじゃない？でも良い意味じゃないし、言わない方が

「皆知らないようなら教えてやる。吉井明久は、文月学園初の《観察処分者》だ」

言わない方がいいと思うのに……雄二君は……。

『……それって、バカの代名詞じゃなかったっけ？』

それを一番言っちゃいけないのに……。

「ち、違うよっ！ちょっとお茶目な16歳につけられる愛称で」

「そうだ。バカの代名詞だ」

「肯定するな、バカ雄二！」

「……………明久、それは否定できない事実よ……………」

「……………アキ兄は、否定できないと思う……………」

それに、さっきの言い訳は、無理があると……………思う。

私でも、アキ兄がバカってというのは……………否定はできない……………。

観察処分者っていうのは、学生生活を営む上で、問題のある生徒に課せられる処分のことなの。

去年にいろいろとあって、アキ兄はこれに該当しているの。

アキ兄が勉強ができていたら、観察処分者にはならなかったと思うのに……………。

「朝日はともかく、月夜にまで言われるなんて……………」

「明久、私はともかくってなによ」

「……………ごめんねアキ兄」

「あ、あのう。それって、どういうものなんですか？」

あ、瑞希ちゃんは、観察処分者のことしらなかつたんだね。

痛みとか疲労とか、何割かアキ兄に返ってくるんだもん……。

『おいおい。《観察処分者》ってことは、試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいってことだろ?』

『だよな。それならおいそれと召喚できないヤツが1人いるってことになるよな』

あ。アキ兄がばれたって顔してる。

「アキ兄。試召戦争するなら、アキ兄も参加しなくちゃだめだよ。」

「気にするな。どうせ、いてもいなくても同じような雑魚だ」

それはひどいよお……。

「雄二、そこは僕をフォローする台詞を言うべきところだよな?」

「雄二、ホントは明久のこと雑魚とか思っていないでしょ?それどころか戦力になると」

「とにかくだ。俺達の力の証明として、まずはDクラスを征服してみよつと思っ」

「うわ、すごい大胆に無視された！」

「……私まで無視しなくても」

「……無視はやめてあげようよ雄二君……」。

【第10問】

side 月夜

「皆、この境遇は大いに不満だろう？」

『『『当然だ!!』』』』

「ならば全員筆^{ペン}を執れ！出陣の準備だ！」

『『『おお つ!!』』』』

「俺達に必要なのは卓袱台ではない！Aクラスのシステムデスクだ！」

『『『うおお つ!!』』』』

「お、おー……」

瑞希ちゃん、無理にこのノリに乗らなくても……。

「明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になってもらう。無事大役を果たせ！」

え?……ダメダメ!!そんなことしたらアキ兄がボロボロになっち

やう!!!

「……下位勢力の宣戦布告の使者ってたいてい酷い目に遭うよね？」

「大丈夫だ。やつらがお前に危害を加えることはない。騙されたと思っただけだ。」

「本当に？」

「本当なわけないよ!? 騙されちゃダメだって!!」

「もちろんだ。俺を誰だと思っている。大丈夫、俺を信じろ。俺は友人を騙すような真似はしない」

「してるよ!? たった今!!」

「わかったよ。それなら使者は僕がやるよ」

「だ、だめえ!!」

「……あ。叫んじゃった……」

「月夜? どうしたの??」

「せ、宣戦布告には行っちゃダメ！アキ兄がボロボロになっちゃう
！！！」

「そんな！！雄二貴様、僕を騙したな！！」

「チツ……俺が明久を騙してるわけないじゃないか」

「嘘つくな！！今舌打ちしただろう！！」

「もう、雄二が行ってきなさいよ」

「なに言ってるんだ！俺がわざわざ危険なところに行くわけがないだ
ろう！！」

今、騙してたことを自分で言っちゃったのと同じだね。

「むう。じゃあ、アサ姉をDクラスに送り出す」

私は、アキ兄の腕にしがみつきなから言う。それによって2人が驚
いてたけど、私は気にしないもん。

「いや、それは相手に佐坂姉妹がいることがばれてしまうからやめ
てほしい」

「じゃあ、アキ兄以外の人が行ってよ」

「月夜、明久が行ってボロボロになって帰ってきたらイヤ??」

「うん。もちろん」

「じゃあ、明久が宣戦布告に行ったらDクラスの人たち+雄二をボロボロにする」

「よし、俺が行って来よう」

「……………アサ姉すごいよ……。雄二君すごい勢いでDクラスに行っちゃった…………。」

「……………あのさ、月夜。そろそろ離れてくれないと、僕宣戦布告しないのに殺されそうなんだけど…………。」

ん？あ、私アキ兄の腕にしがみついたままだった！！殺気をすごく感じる！！

私が慌てて手をはなそうとしたら、

「月夜、そのままでもいいわよ??こいつらは倒しておくし」

アサ姉がそう言ってくれたので雄二君が帰ってくるまでアキ兄の腕にしがみついてました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0117q/>

バカと双子と召喚獣

2011年8月8日10時14分発行